

統一思想の価値論から見た真の家庭の幸福観

文炳祚(鮮文大神学科)

I. 序

現代社会で価値が持つ意味は何より重要な位置を占める。

その間、価値概念はなにが正しくて正しくないかを判断する思惟の推量の役割をする基準として使われたりもした。

特に現代社会で価値問題が重く作用して複雑で多様になっていく事態を見ながら、問題解決を提示しようと思ったためだ。

このような次元で統一思想は価値問題としてあらわれた様相に、いろいろ指摘している。第一に、政治、経済、社会、教育、芸術などあらゆる分野で神様を排除し、宗教を軽視した。

第二に、唯物論、なかでも無神論特に共産主義理論の浸透による価値観の破壊だ。

第三に、宗教相互間の対立や思想相互間の相反のためだ。

第四に、中世以後の伝統的な宗教の徳目が科学的な考え方をを持った現代人を説得するのに失敗したと見ている。

もちろん統一思想が指摘したように、このような価値観の混乱を通じて互いに相反する問題が引き起こされたが、こういう影響により今日現代の家庭は新しい混乱に直面したのも事実である。

その混乱は現実的な価値観の混乱から来たものもありえるが、もう少し内的に摂理的な側面で考察すれば、神の復帰摂理の過程で必然的に真の家庭を要請する過程から来た混乱とも見られる。

したがって今扱おうとする神の真の愛に基づいた絶対価値としての参加定款は、新しい価値観が要求される現実の中で、その正しい定立が要請されている。

II. 統一思想の価値論に関する議論

統一思想から見る価値は主体の欲望を充足させる対象の性質と規定する。

すなわち価値は主体が認める対象価値の概念だ。(294) 主体が認める対象価値という点で理解すれば、やや価値の概念が主体の欲求の意図により変化されることができるような性質の価値と誤解されることもできる。

したがって価値の正しい理解(利害)のためには、まず価値が持つ属性として価値の本質的要素を分からなければならない。

統一思想は、価値は現実的に評価されるという点で現実的価値を提示している。

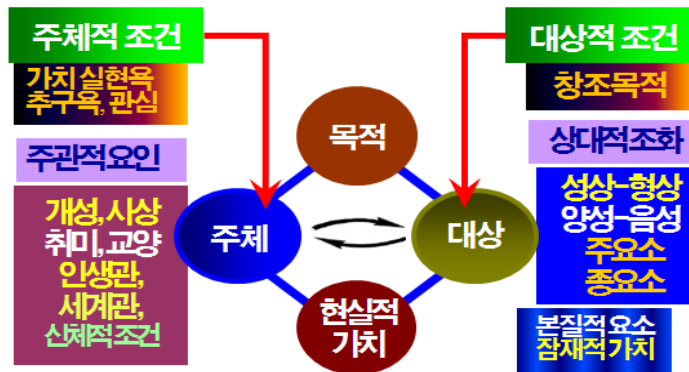
評価は主体と対象の間で授受作用によって成り立つが、このように評価によって成り立つ価値を現実的価値という。

このような現実的価値には潜在的価値が内在している。

潜在的価値は価値の本質的要素の内容、属性、条件に関することであって、神の創造目的に対応する相対的要素として、喜ばせようという情的な衝動に対応する真善美の価値のことだ。(301~302)

結局、価値はどのように決定されるのか？ 主体の価値追求欲と対象的条件としての潜在的価値が相互作用して調和を作り出す時、価値が決定される。

価値の主観的要素には、思想、趣味、個性、教養、人生観、歴史観、世界観などがあるが、このような主観的要素が対象に反映されて、その主体だけが感じる現実的価値が決定される。(303) これを図表で考察すれば次のようだ。



それなら人間の‘主観作用’により変わる価値は相対価値といえるか？ 相対価値は絶対価値に対応する概念として具体的な辞書の定義がないから理解するのに難解なこともあるが、概して人間の認識にとまらぬ主観作用により、異なって受け止められるという点で相対的価値と理解することができる。

価値に対して考える時、私たちがよく重要視する価値にはどんなものがあるのか？ 例をあげるならば、権力、お金、名誉、健康、職業と職責、趣味、おいしい食べ物など人間が喜怒哀楽として経験できる価値を考えることができる。

このような価値は人間において大変重要に作用する必須の要素だが、しかしい永遠、唯一、絶対、不変のものではない。

もしこのような価値の要素が永遠であるならその価値が喪失する時、人間はこれ以上生きる価値を感じられない場合もある。

今日において多くの人々が喪失感により自殺したり、暴力を振るう状況を考慮する時、このような価値的要素が絶対的なことと見なされれば、自身が生きていかなければならない価値が喪失するためだ。

このように相対的条件にとまらぬ価値は変化されるという点で永遠性を持つのではな

い。

また価値として道徳や宗教的価値を中心とした信念を考えることができる。

特に今日、ある宗教的基準を価値として接近して理解する時、人間が信じているどんな信念体系が確固不動したことと見なされる状況で生じる大小の問題が起きているのも事実だ。

統一思想では相対価値に関し、価値の相対的基準として説明している。

相対的基準としての価値はあくまでも時代と場所により、歴史を通じて変化してきたのであるが、特に宗教的価値に関し次のように説明している。

神が人類を最終的に救うために、一定の時代に、一定の地域に、一定の教祖を立てて、まずもって、その時代、その地域の人々を善なる方向へ導こうとされたのである。すなわち神は時や場所によって、言語、習慣、環境の異なる人々に対して、その時代、その地域に適した宗教を立てて救いの摂理を展開されたのである。(307)

統一思想は宗教とともに文化または思想を通した価値の差を明確に認識しているという点で特徴的だ。共産主義がいう平和観は自由主義世界がいう平和観と異なっている。もちろん平和は消極的意味では戦争と暴力がない状態を意味することであるが、積極的意味では相互交流と対話を通じて、相互依存しながら協力を通した平和の状態を意味している。

共産主義がいう平和観は消極的平和として唯物論的平和観だ。

唯物論的平和観は消極的平和観でもなく、非常に独特の自己矛盾を持った平和観だ。

相互依存を通した協力よりは相互闘争を通した暴力的方法に依存するのであって、その理由は自由主義世界を主導している勢力(ブルジョア)がある限り平和がありえないと見るためだ。

これに比べて、自由主義世界の平和観は完全なものではないが、それでも暴力として戦争状態を望まないで相互依存を通した協力に重点を置いているという点で消極的平和観と積極的平和観を折衷している。

このようにどんな宗教や国家が信じている信念体系として、価値はその時代と場所を異にして理解されて受けとめられているのだ。

哲学において、価値観に対しても統一思想はいくつかの点を明らかにしている。

近代哲学に至り、デカルトの合理的価値観は理性による確固たる意志に基づいている。

(336) デカルトは若い頃、世界を旅行しながら、ある集団の内部で真だと信じることを他の集団では偽りと受け止めていることを知ることになった。

風俗と習慣により生活してみるならば、自分も知らないうちに、その地域と共同体で常識とされる価値観に従うものであるからだ。

これを先入観に関することとして、デカルトは不確かなことは徹底して疑わなければな

らないという‘方法的懐疑’を逆説した。

価値観において、先入観に関することは実は大変重要な概念を占める。

先入観はそれ自体としてデカルトがいう不確かで、徹底的に疑うほかはないことでもある。これは対象に対して人間が自身の誤った観念を持って把握するケースに該当する。それでも先入観がいつも誤ったのではない。

ガダマー(Gadamer, Hans-Georg)は、彼の哲学的解釈学に立脚して、先入観に言及したが、先入観はハイデッガーの理解の先構造に基づいた先判断的意味だ。

ガダマーにあって、先入観は、誤った判断というよりは理性で判断すること以前の経験に基づいた先理解に基づいたものだ。

この先入観は固定不変なものではなく、より良い理解のために開放されたものだ。

もちろん価値観において、デカルトがみた先入観やガダマーがみた先入観が互いに異なる理解をしているとしても、誤った見解を把握して理解しようとする意志においては同一なのだ。

このような価値に対する理解は、あくまでも相対的価値の基準によりいくらかでも変われるために、絶対価値に至るための過程で必ず経験しなければならない過程として理解しなければならない。

また統一思想は価値を取り扱う哲学と事実を取り扱う自然科学が分離したことを指摘した。実際に科学者が価値を度外視して事実だけを研究した結果、人類を大量殺戮する兵器兵器の開発、自然環境の破壊、公害問題などを招くに至ったためだ。(340) それなら絶対価値はこのような根本問題を解決することができるか? これに答える前に先に絶対価値が何かを分からなければならない。

これを知るためにまず次のことを考察しよう。

すべての万物は共通の属性を持っている。

それは宇宙万物が神様に似るように創造されたためだ。

地球上に散在している色々な宗教、文化、思想、民族は各々その価値観が違うのが普通であるが、そこには根源者に由来する共通性が必ずあるはずだ。(307)

地球上に散在している色々な宗教、文化、思想、民族を通したそれぞれの価値観は相対的でありうる。ところでその価値観に共通した属性として絶対者の神を想定する時、その価値基準は変わる。

統一思想は、絶対価値として神の属性に対して、法則としてのロゴス(logos)と心情として真の愛(True Love)を言う。

すなわち絶対価値は、価値評価の絶対的基準になることができる共通なる神の真の愛と真の真理から見たものだ。(308)

絶対価値に関して、文鮮明先生は神の愛の心情圏によって、すべての相対的な価値を包

括しうると見た。

このような絶対価値は理性的な前提、あるいは相対的な主義や信念に土台を置く価値より深くて広くてまた恒求的だと見たのだ。

また理性的探求はそれが真の愛に土台を置いた絶対価値によって導かれる時、はじめて人間の真の幸福に寄与することになると見た。(『平和経』,728-729.)

文鮮明先生は1972年度から‘国際科学統一会議’で絶対価値という言葉を使った。

文鮮明先生が“私たちが必要とするのは産業革命や技術革命だけでなく、より大きい人間意識の革命です”と語られたのは、社会問題の解決は自然科学にだけに限定するのではなく、人間の意識が変化する価値追求に力点を置いたのだ。

具体的に‘絶対価値の求心性’を語られることによって、“すべての人類が国家や種族を超越した兄弟姉妹として一つの間人家族として生きていく新しい世界秩序を確立することによって、真の平和と幸福の理想世界を享有することができる”と見たのだ。

したがって外的な科学は内的な形而上学的世界の中心点と連結して、後者を不変の軸として、電子が授受作用で永遠に周囲を回ることになれば、時空のすべての存在に絶対的な意味と価値が付与されるのだ。

このような価値観が持つ意味は現実世界において非常に实际的だ。

今日、世界は科学が眩しく発展したが、その裏面には核戦争により破壊されることができける可能性も見えている。

このような状況で、もし知識に明確な価値観が設定されないならば、未来社会は非常に不透明にならざるをえなくなる。

文鮮明先生は人類に対するこのような現実的未来観に対して明確に洞察し、このような世界の混乱を收拾するためには、統一された価値観が絶対的に要求されると見られたのだ。

その統一的価値観がまさに価値評価の絶対的基準として神の真の愛と神のロゴスとしての真なる真理であって、人類はこれによって混乱した価値観を收拾しなければならないのだ。

ところで統一思想から見た価値観において特徴的なのは、絶対的基準によって絶対価値が決定されるとしても、主観作用による個人差を認めているという点だ。

すなわち絶対価値は個人差を含んだ普遍価値として見る観点だ。

したがって絶対価値は普遍相の性相、生心、心情、logosとともに全体目的に基づいた評価基準であり、同時に主観作用として個別相および個体目的として評価基準に基因するのだ。(310) このような統一思想の絶対価値の根拠は、人間を個性体としての差性を認めながらも、普遍的に存在する絶対価値の基準としての真理に立った絶対愛を想定して到達したのだ。

このような根拠によって、絶対価値としての価値観の統一は可能だと見た。(311)

Ⅲ. 真の家庭の幸福観

これから扱う真の家庭の幸福観はあくまでも統一思想の価値論と文鮮明先生のみ言に基づいて扱おうと思う。真の家庭は新しい生活的指導理念の絶対価値に立って立てられる家庭の価値概念だ。

今日において真の家庭の価値が必要なことは時代的要請とも関係する。

21 世紀の未来を展望する学者らは、これから世界は絶対価値として真の家庭が基礎になる真の愛の価値が必要だと力説している。

真の愛の価値は、お互いを尊重して相手を認めながら、ために生きる現実価値として実際の人生の中で、諸般の問題を解決するキーワードと見ている。

なぜなら真の愛は、男女間の愛、家庭における夫婦愛の中心になりながら、この愛が拡大して、国際社会で政治・宗教・教育など、すべての統一された価値を形成することによって、実際に社会で起きている紛争、暴力、戦争を解決する指導理念になることができると思われるためだ。

それなら真の家庭の幸福観をいうためには、幸福の意味も同時に省察されなければならない。

真の家庭の幸福観を論じることに先立って、まず統一思想の価値論に基づいて、幸福観を先に調べて、続いて真の家庭の幸福観に対して考察する。

1. 統一的価値観の定立としての幸福観

幸福に対して、アリストテレスは彼の『ニコマコス倫理学』を通じて言及しているが、彼は‘究極目的としての幸福’を言う。

人間が幸せであるためには、具体的な行為を通じて、ある目的を指向するのにその目的達成を最高善として、幸福と見た。

行為において、それ以上手段にならない究極目的を言ったのだ。

アリストテレスがたとえ究極目的として幸福を言っているとしても、究極の目的として到達しなければならない最高善の状態を明確に明らかにしていない。

幸福がたとえ自己充足的といってもその基準もあいまいだ。

このように幸福をある行為やそれを通じたある目的の達成から規定する場合に、幸福は過程的な認識客体として規定するのが難しくなる。

カントも幸福に関し不明確なこととして規定した。

カントは認識論において、ありのままの客観的世界を認識するのではなく、先験的形式として、ある‘枠組み’に合うように構成して認識する構成主義 constructionism を言うことによって、当代にコペルニクスの認識の転換をもたらしたことになる。

すなわち、あるコップが机の上に置かれているという時、カントはそのコップは物自体としては認識できなくて、ただしそのコップが空間的に机の上に置かれているコップを認識できるだけであり、時間的に今この瞬間に存在するコップとして認識するから、

私たちはただそのコップが存在するための現象として認識できると見た。
カントはこれを感性と呼んだが、感性は人間が持った悟性(Verstand)として理解力の作用で整理され、統合されて、一つのコップという概念で把握するのだ。
このようにカントの論理ならば‘幸福は何か’の質問に答えようとする時、これは‘神は存在するのか’の質問と同じように‘私は何が分かるのか’という彼の『純粹理性批判』から見れば、理性の範疇の中で論じることができなくなる。
しかしカントは彼の『実践理性批判』(1797)において、‘私は何をすることができるだろうか’という質問に道徳的行為として説明しようとした。
カントが見た道徳律は普遍性に従うことであり、‘自身を含んだ他の誰も道具や手段で取り扱ってはいけない’という定言命令だ。
ある行為が要請される時、私たちは理性により決定を下すのが難しかったとしても、よく道徳的判断によって、その行動を決めることはできるためだ。
その時、私たちはこのような定言命令として、道徳的判断とその行為の結果が人間の幸福とどんな相関性を持っているのかという質問を投げることになる。
「もし幸せになろうとするなら…しなさい!」という仮言命令でなく、道徳的法則によって、当然幸せでなければならぬということが出来るためだ。
それなら私たちはカントの幸福論に接近してみる時、重要な事実を発見することになる。幸福が、ある行為の道徳法則として単に義務を通じた実践によって与えられることができるというならば、その幸福はこれ以上主観的であることができなくなる。
統一思想も明確にこの点を指摘している。
カントは実践理性に基づく義務感だけを善の意基準としていて、このような義務や規律それ自体は目的になれないと見た。
神の創造目的を知らずにいるカントの立場では、善の基準として道徳律だけを義務として主張したので、その目的性として真の愛の実現のための方便となることを見過ごしたと見たのだ。
カントは結局すべての人々が完全に道徳的な人間になればそれで幸福が実現されると見たのだ。(405-406)
カントの義務論的道徳観に立った幸福観に対して、幸福のための幸福を強調した功利主義者のベンサム(J.Bentham)は‘最大多数の最大幸福’を言った。
ベンサムは快樂や幸福を産む行為は善であると見たが、ベンサムのこのような幸福観に対して、統一思想は物質な快樂の追求であるとして反対した。(408) 人間が快樂を得るために苦痛を避けて、自身の快樂を望みながら苦痛を恐れなければならないベンサムの幸福観は、彼の‘功利性’の原理による幸福だけを取るためである。
ところでベンサムが物質的快樂と言ったのは時代的な背景と関係すると指摘している。英国を中心に18世紀末から19世紀に達する過程で発展していった資本主義の進展で、劣悪な生活条件、慢性的で周期的な失業、極度の低賃金、劣悪な衛生と生活条件など質

的に新しい社会問題が引き起こされたためである。

このような最悪の貧困社会として環境が起きた背景において、功利主義を言ったベンサムは、統一思想から見て環境復帰のための思想と見た。(409) 物質的に劣悪な環境の中で社会的に最大多数に幸福を持つことができる社会倫理を考えたベンサムの考えは、ひとまず肯定することができるを見る。

ただし快樂と苦痛の二重的構造から見たベンサムの幸福観は、最大多数が満たされることができる幸福だけを考える場合、疎外された少数の幸福は無視される可能性が多いという点がある。

また幸福を最大多数が享受することができる量的な総量を計算できるか疑問であるが、これは人間の個性が持つ個体の幸福指数を考慮しないのだ。

ミル(J.S.Mill)はこのようなベンサムの客観主義的幸福観に対して、幸福を追求するにさいして、主観的の見解として観点を受け入れるという点で、主観的な幸福観を言った。ミルもまた、快樂を幸福と一致させる概念から接近した。

ただしミルは快樂における質的問題を提示して、‘人間が本当に感じることができる快樂は低い段階の感覺的快樂でなく高い次元の精神的,文化的快樂’と見たのだ。

このようなミルの快樂観に対して、快樂の質的決定に対する問題が難点で持つようになることを指摘している。

すなわち、どんな快樂の質が高くてもどんな快樂の質が低いのかに対して、言うことが難しいということだ。(金恒濟,2013) ミルによれば感覺的快樂は無条件に低くなければならない。そして知的快樂だけが高くなければならぬ。

しかし実際において人間の欲望を中心とした快樂の質的水準は、与えられる事態により異なって解釈されることができる。

いくら知的快樂でも、その快樂が自分の利己的な欲望が中心になれば、その快樂はややもすれば、すべての人を害する結果を招くようになるためだ。

いくら感覺的快樂でも、事態によりその快樂は人間に最高の喜びを与えることができる質的要素を持っていることができる。

このように快樂主義に立ったミルの幸福観は、一方で説得力があるかもしれないが、それにもかかわらず‘質的差’による快樂が曖昧だという点と共に瞬間的に経験される幸福の状態を否定した矛盾を抱いている。

すなわち幸福がマズロー(Abraham Maslow)が言う‘絶頂経験’として、瞬間に起きるうっとりした体験であることもあるが、ミルはそのような歡喜の状態は持続的でないから否定したのだ。

ミルが言う幸福は苦痛がない快樂として質的快樂をいっているけれど、根本において、その快樂が追求する欲求としての‘欲望’に対する理解が要求される。

功利主義で言う快樂として幸福を言う時、まず快樂があたえる欲望に対する否定的先入観が入って(くるためだ)。

欲望に対する論理は、哲学的に事実、構造主義と後期構造主義時代に入ってきてラカン(J.Lacan)とドゥルーズ(G.Deleuze)により一つの哲学的論理として浮び上がった。

今まで西洋の精神を支配してきたギリシャ哲学伝統とキリスト教において、欲望というものは基本的に抑制されなければならないことと考えられたためだ。

そのような結果、欲望に対する否定的な見解は、精神と肉体あるいは神と被造物という二つの二元論の枠組みで理解された。

すなわち肉体的な欲望は悪いことで精神的な欲望は良いという二元論的思考に解釈したりしたのだ。

もちろん東洋の宗教では、概して食欲に対しては克服しなければならないことと見る。だが現代の消費社会に入ってきて、人間の欲望をむしろたきつけるような環境的事態に置かれることになった。

欲望を増幅させることによって商品を販売しようとする産業資本の意識的・無意識的動機のためだ。

統一思想において、幸福は明確に欲望を達成することによって成り立つのだが、その欲望が何を中心として授受作用するのかにより色々な形態の結果としてあらわれる。

現代の思惟者が、いくら欲望を論理で幸福をいっても、欲望の主体として人間がなぜ生きていかなければならないのかに対する明確な答を与えない以上、その答は不明なことにならざるをえない。

結局、欲望は神から与えられた創造本性としての価値を持つ。

価値は主体の欲望を充足させる対象の性質と規定しているから、その欲望の目的と方向が何を中心として決定されるかによって変わるのだ。

欲望を中心と見る時、人間の幸福は明確に精神的幸福と物質的幸福が統一されなければならない。

このような意味から統一的価値観で見る幸福観は真の愛の幸福観だと言える。

真の愛は心情が動機である。

統一思想において、‘心情は愛を通じて喜ぼうとする情的な衝動’である。

概して人間は愛を通じて喜びを得ようと思うが、その愛が公益性を帯びるためには、より根源的なものとして、皆が好むことができる幸福の根源にならなければならない。

またその愛には一定の秩序があって、皆が安らかである平和の根源でなければならない。

このような皆の要素を充足させることができる愛は、まさに心情に基づいた真の愛(True Love)を通じて可能である。真の愛の欲望だけが人間を永遠に充足させてくれることができる根源であるとする。

統一思想では価値生活に対し‘ために生きる’愛の生活と規定している。すなわち家庭のため、民族のため、国家のため、人類のために生きる愛の生活である。そして究極的には神様のために生きるのだ。(233) ために生きる人間は性相と形状の統一体として存在する。またそういう人間は霊人体と肉身の二重的存在から構成されている。人間の

心から見れば生心と肉心の二重心の統一体である。

したがって統一思想では、価値観は欲望を中心として、その充足のための二重目的の観点から接近する統一的価値観として、性相的価値観と形状的価値観を提示している。

最初に、性相的価値としての幸福は、その欲望が神の創造目的を指向する性相的欲望の生心の目的と方向により真善美としての価値を追求することになる。

形状的価値は神が人間を創造された目的として、生育して、繁殖して、万物を主管せよという 3 大祝福を成就するための目的性を持つ。(298) 人間はこの目的性を中心として自身の欲望により真善美としての価値を実現することによって喜びを享受するのだ。ここで真善美としての価値はあくまでも人間の潜在意識に位置している愛が基盤になる。

このように価値は主体と対象の間の授受作用によって成りたつが、現実的価値が決定され、続いて真善美として彼の内部に本質的要素として性相的価値である潜在的価値を持つことになる。

統一思想は今日、人間生活の価値の基準が真善美としての性相的価値は衣食住を中心とした形状的価値のための手段になったと指摘する。(234)

第二に、人間の形相的価値としての幸福は、物質的な生活を追求しながら肉心が願う目的と方向としての価値を実現することを意味する。

形状的価値としての人間の形状的欲望である肉心の目的と方向により、依・食・住・性を追求するのであるが、この形状的価値は性相的価値の実現に必須条件になるのであって、形状的価値の基盤もやはり愛である。(300) 例をあげれば、人間が食べるのも愛として愛するための目的で食べることになれば、その食べ物が身体に吸収されるようになる過程で愛の細胞に変化する原理である。

これは今日、精神健康学の側面でも考慮しなればならない大変重要な価値論的理解である。したがって統一思想は形状的価値としての身体の欲望を否定しない。身体の欲望が真の愛を中心として全てが授受作用して完全な関係性を結ぶことになれば、性相的価値としての欲望を指向しながら、発展的に変化するためである。

ただし身体の欲望が、ラカン(J.Lacan)が指摘したように、欠乏としての欲望としてあらわれる時、自身も知らないうちに充足を満たすための欲望として現れるという点だ。欲望と関係した形状的価値としての幸福は、微妙な心理的要因が作動する原理だから、これを治癒するためには実際的環境条件と共に心理的治癒作業が並行されなければならないであろう。結局、統一思想の統一的価値観にともなう幸福観と関係して、私たちは真の家庭の幸福観を考察することができるようになる。

2. 真の家庭の幸福観

真の家庭の幸福観は性相的価値としての真の愛と形状的価値として衣食住と性の価値が完全な授受作用を通じて、神の对象的価値を実現する幸福観である。

神の創造目的が家庭を通じて実現される過程で、内的授受作用を通じて愛が授受され、外的授受作用を通じて、実体的に夫と妻、そして父母と子女、および兄弟が愛の授受をなしながら幸福を実現することである。真の愛は真の家庭を作る核心価値であり、統一思想は性相的価値として規定する。

真のご父母様は真の愛の人生に関して、次のように定義した。

真の愛は公益性を帯びた秩序、平和、幸福の根源です。

真の愛の本質は受けるという愛ではなくて、人のために、全体のために先に施して、あげる愛です。与えても、与えたということを記憶しないで絶えず施す愛です。

喜びながらあたえる愛です。

(『平和神経』25.)

‘統一的価値観定立としての幸福観’で見たとおり、性相的価値としての真の愛が真に真の家庭を作るための幸福の本質的要素になるためには、幸福と関連して、形状的価値と統一をなさなければならないことが分かる。

統一思想から見た家庭観は天道による秩序に準じた価値観に従うことであり、価値秩序を尊重している。すなわち家庭を宇宙の秩序体系を縮小した小宇宙と見ているのだ。

(395) ここで言う宇宙の秩序はあくまでも真の愛にともなう原理的秩序が内的・外的授受作用を通じて全てに通じていることをいうのだ。

最初に、まず真の家庭を作っていく過程において愛の関係が具体的にどのように形成されて行くのかに対する説明が要請される。真の家庭のための愛の関係は四位基台による内的授受作用の関係を通じて成り立つ過程である。

生心の生活は神の愛を中心として真善美の価値として授受する生活をいう。肉心の生活は肉心の目標であるの衣食住と性の生活が中心に授受する生活である。したがって真の家庭が成り立つためには、主体である生心の生活と肉心を中心とした生活が相互対象性を成して、よく授け受けなければならない。

このような状態を私たちは真の家庭をなした家庭的四位基台とすることができる。

なぜなら家庭的四位基台の基礎は、主体としての生心と対象としての肉心がよく授け受けすることができる基台が形成される時、実体的な四位基台として拡張が可能なためだ。これは第1祝福のための家庭的規範になる。

第二に、実体的基台として家庭的四位基台がどのように形成されるのかに関することを分からなければならない。

神の真の愛が完全に実現される基台がまさに家庭的四位基台である。

家庭的四位基台は、とりもなおさず父母の愛、夫婦の愛、子女の愛として現れる。

神を中心する時、父母や夫婦や子女は神の愛の対象になるためだ。(390-391) これは第2祝福のための家庭的規範になる。神の愛は絶対的だが、家庭的四位基台において位

置と方向により分性的愛として現れる時、愛の主体は変わる。
愛を授け受けする速度と方向そしてその質により、主体と対象の関係が変化するためだ。
これは愛の関係における能動的変化のことを言う。

今まで東洋的家庭観は、時には徹底的に夫婦有別を言って、男性中心の価値観を確立することさえあった。また長幼有序を言って、大人と子供のための縦的な秩序だけを強調したりもした。もちろん大人と子供の間には一定の礼儀として守られなければならない道理がある。けれども、あまりにも礼儀をせんさくすることになれば、その関係の間で成り立たなければならない愛の価値を通じた授受の情を損なうことがあり得るのだ。

したがって家庭的四位基台を通じた愛の秩序は、大人と子供の間でいくらでも主体と対象関係が変わりえると言う。

これは統一原理において、三対象目的と説明しているが、三対象において、ある一つが主体になれば、他は対象の位置に置かれるようになるという原理だ。（『原理講論』34参照。）例をあげるならば、孫が祖父と愛の授受関係を通じて暮らしている時、孫は祖父の愛の対象関係に置かれられながら、同時に孫の立場から見る時、祖父は対象関係に置かれるのだ。

ここで重要なのは、家庭において互いに対象性を成して、愛をやりとりする時、家庭の構成員の間に尊重と配慮が成り立つことができる環境も重要視しなければならないという点だ。

トーマス・H・グルーム(Thomas H. Groome)は、実践的概念としてプラクシス(praxis)を言う。彼の言うプラクシスは役割を分けて、参加する実践の概念である。

グルームは現在の行動(present action)とは、現在の瞬間の明白な生産的な活動以上の多くを意味すると見た。したがって現在の行動は批評的省察を通じて、新しく実践的接近として遂行できると見た。すなわちグルームは、具体的に批評的省察に対し、現在の行動の誤ったことを発見することだけを言うのではないと言った。彼が言う批評的省察は、すなわち現在の行動において、良いことと真実なことを確認しながら、限界を識別する積極的な省察と関係するためである。

このようなグルームの認識的発見は、今日の家庭を中心として、環境的側面から対象性を確認する過程において適用することができる。

グルームは最近の著書の『Will There Be Faith、信仰は持続できるだろうか?』において、両親が激しい偏見を持って人種、宗教、経済力、成績、偏向、年齢、能力、性別、民族に対して話すのを子供らが聞けば、彼らはたいてい両親のような偏見を持つようになると言う。

したがって家庭は私たちと‘同じでない’人々、すなわち‘他人’を歓迎して尊重するように養育される場所と見なければと主張する。

したがって彼は、家庭の核心的課題は平和を追求する家庭であると見た。

間違った時、誤りを認めて、悲しい時、悲しみを表現して、必要ならば許しを求めて、

報復や復讐しないで許すことを家庭で習うのだ。

このようなグループの家庭観は、統一思想が指向する真善美の価値の追求を越えて、文鮮明先生が指向する真の愛としての価値を具体的に実践するプラクシス(praxis)概念と理解しなければならないだろう。これは積極的概念のプラクシスとしての幸福観に連結するためだ。

第三に、家庭的四位基台を通じてあらわれた主管性の確立が具体的にどのように成り立つか、分からなければならない。ここで主管性が確立される意味は、具体的に家庭の縦的・横的秩序によって、価値観が拡張されることをいう。

家庭で両親は子供に慈愛を施して子供は両親に親孝行する。統一思想ではこれを縦的価値観と見た。これを社会、国家に適用すれば新しい国家観が出てくるのだ。

すなわち国民は国家のために奉仕と献身する価値として現れながら、国家は国民に恵沢を与えて保護しながら育成する責任を負うのだ。

家庭では横的秩序を通じて横的価値観が現れる。すなわち夫婦間では和愛、兄弟姉妹間には友愛として現れながら、隣人、同胞、社会、人類などに価値観を拡大しながら和解、寛容、義理、信義、礼儀、謙譲、憐憫、協助、奉仕、同精などの徳目が横的価値として実践されるのだ。(325 参照。)

このように真の家庭が成り立つ過程は縦的秩序を中心とする価値観と横的秩序を中心とする価値観が互いに統一的に融和することで成り立つのだ。すなわち内的授受作用と外的授受作用が統一的に授受されることで真の家庭が実現される原理である。

例をあげるならば、家庭で夫婦が互いに対話をする時、どのようにしなければならないかだ。対話に先立って、人間は一人の夫、一人の妻として、人間が持つ思考の作用の観念、概念、原則、数理などの過程を通じて形成された認識作用が適用される。この時、思考による授受法が適用されるのであって、対話にはあくまでも相手が理解できるように配慮が要請される。私が相手を理解するためには、相手が持っている観念や概念が、私が持っている観念や概念と一致しなければならないことを意味する。これが内的授受作用の意味だ。

したがって夫と妻の互いに違う観念にともなう差を理解することが重要だ。まずその差を理解して、お互いが持っている観念や概念にお互いが合わせて行こうとする意志が必要だ。これが実践意志としての外的授受作用の意志的作用だ。夫婦が意志を合わせ、考えを合わせ、心を合わせていく過程において、内的・外的授受作用を通じて似ていく相似性の法則により生きていくことをいう。

神が下さった祝福は、夫婦がお互いに似ていく相似性を通じて、神の心情と理法そして創造性に全て似るようになることを願われた。(345～349) 私たちが神に全て似ていくためには、まず神の完全性に似なければならない。

神の完全性は、人間が神の心情を中心として生心と肉心がよく授けうけすることによって、合性体を成し遂げることによって、神様の前に真善美の生活を通じて喜びを通じた

価値的存在になることをいう。これは第一祝福になる。

次に、神の繁殖性に似なければならない。神の繁殖性に似る意味は、神と同じように陽性と陰性が授受作用ができる能力を備えなさいという意味である。すなわち一人の男性と一人の女性が結婚をして、子供を繁殖して、成長する能力をいう。第二の祝福である。最後に神の主管性に似なければならない。主管性は神の創造性に似るということであり、心情を中心として万物を主管する能力をいう。第三の祝福でなる。

このように人間は神の三大祝福を通した相似性として、完全性と繁殖性そして主管性に似て、真の家庭を作り、神の前に永遠・唯一・絶対・不変の対象的価値を持つことになるのだ。

人間において、真の家庭を作るためには、結局、成長期間を通じて、彼の責任分担として人格を成長させていくべきであり、原理を通した秩序とともに心情体恤の過程が必要である。(351) 人間を成長させてくれることができる最も大きい原動力は心情体恤を通じ真の愛である。

家庭において、神の真の愛の四対象である、父母の愛、夫婦の愛、子女の愛、兄弟の愛を通じて分性的で現れることによって、実体的に人間を通じて、愛の体恤過程であらわれるのだ。統一思想は具体的にこれに対して四大心情圏として説明している。(801～814) したがって重要なのは、家庭内で、まずすべての人間が対象意識をもって、自己中心性を捨てて神を求めなければならないということだ。そして実体的に、神に似ていこうとする努力を通じて、対象的位置に立たなければならないのだ。この時はじめて家庭内ですべての人間に愛の平等性が成り立ちながら、満足と喜びそして感謝が起きることによって、平和の家庭を作ることができるようになる。

文鮮明先生が主張する真の愛を通した絶対価値の家庭観は、結局、第一の祝福として心の平和を成した基盤から出発する。続いて実体的に授け受けすることができる愛の心情圏を形成した第二の祝福を成し遂げたうえに、万物を主管できる主管性を完成することによって成り立つのだ。このような実体的真の愛による真の家庭に対し、『真の父母経』では次の通り説明している。

アダムとエバが心の中に神様を迎えて一体になって、完成した基盤の上で結婚をして子供を産んで家庭を作れば。アダムとエバは外的で横的な真の父母になって、神は内的で縦的な真の父母になるのである。(『真の父母経』58.)

このような真の家庭観は一般世俗的な家庭観とは区別される。なぜなら真の家庭はまさに縦的な神を迎えて実体的に顕現される横的な真の父母との関係の中で成し遂げる家庭であるからである。真の家庭として、すべての祝福家庭は基本的に神を迎えて、神の実体をまとわれた真の父母に侍って生きていく家庭である。

したがって文鮮明先生は 2004 年 5 月 21 日に清海ガーデンで、既存の演説のみ言を訓

読しながら‘真の家庭の絶対価値観を確立して定着’させなければならないと言われた。真の家庭の絶対価値観をたてうるのは心の中におられる神を発見することから出発する。次に、‘神の心は、絶対・唯一・不変’であるために父母の心を体恤することによって理解でき、先有条件として相手を先に認めてから私を主張するべきだ。結局、絶対価値観は、ために存在し、真の愛で与えて忘れてしまう絶対服従の対象として、主体的愛の主人として完成させようとする価値観である。したがって“絶対的価値観はまず互いに相手を真の愛の主人格に立てるためのものである”と言われたのだ。真の家庭として、絶対価値観の核心が父母の愛にあることが分かるのであるが、これは次のみ言を通じても知ることが出来る。

皆さん、家庭はなぜ良いのですか？ それは父母の愛を中心として本然の自由活動の基地になっているためです。見るにはいくらみすぼらしくても、輝く真の愛の核を持った心情で結ばれた人間で成り立つ本来の家庭になった時、人間はもちろん神までも自由に感じられるということです。（『み言選集』 450冊,194.）

また真の家庭において絶対価値観が成立するのは絶対夫婦の愛を言うからである。“夫婦は絶対的次元の縁を土台にした相手関係で結ばれた本来の愛になれば、その愛こそ家庭に幸福と喜びを抱かせる根幹になる”と言われた。絶対夫婦になるのは神の絶対愛の縁の中に結ばれることで可能になる。たとえその過程で困難と苦難があっても絶対愛で結ばれた真の愛の縁を大切にすれば、いつでも回復が可能なためだ。

夫婦仲で平等が可能になるということは、夫婦仲とは、愛の平等、人格の平等、喜びにおいて平等であることを自覚するためだ。また愛の平等として、自覚が起きるのは神の真の愛をやりとりする過程で差別感や不平等感が消えて、愛の同位圏に立っていることが分かるためだ。（402 参照。）したがって文鮮明先生は、真の愛は同位圏と共に、同参権、同居権、相続権が広がるようになると言われた。

したがって本来の家庭を天国の典型と見るのである。本来の兄弟姉妹間にも祖父母と父母に似て、互いに‘大切にする人生’を実践する真の愛の本来の関係が形成される時、その家庭は天国家庭になるのである。

結論的に、絶対価値観による真の家庭の幸福観は神との関係を離れては言えない。縦的な絶対神を軸にして、それと永遠の真の愛の対象の関係を結ぶようになる時、はじめて幸福を享受することができるようになるからである。

神様がいくら絶対者と言っても、お一人では幸福になれません。

…必ず相対的關係を備えたところで成立するのです。…自存する神様も喜び、幸せになるためには、必ず授け受ける愛の相対が必要だということです。（宇宙平和連合創設宣言文『神の理想家庭と平和世界のモデル』）

したがって文鮮明先生は、神様の永遠の対象圏に立った人間が真の父母によって新しい世界に入ることができる起源ができたし、真の父母によってサタンを屈服させることができる内的縁が決定されて、真の父母によって神様を解怨成就させてあげることができる中心が決定されると言われたのである。（『平和経』329.）結局、絶対価値としての真の家庭は神との切れない関係を成した真の父母によって新たに生まれ変わることによってなされる祝福の開門が要請される。この‘祝福の開門を通じて、絶対価値としての真の家庭’を成し遂げることができる幸福が実体的に実現されると見るためだ。このように祝福を通した真の家庭をなすにあたって、絶対価値として真の愛を中心として家庭において、父母と子女が互いに大切に、夫婦が互いに大切にしていける心構えがすべての生活の動機になるから、私たちの生活で幸福を左右する基礎になるのだ。祝福結婚をした家庭はまさにこのような神様の意に基づいて、時にはお互いが国籍を越えて、真の家庭を通じて、神が臨在することができる平和として、幸福の家庭が成立することを信じて実践しようと努力する。もちろん現実的には障害物が存在する。しかし愛の関係でその障害物はもう壁にはなれない。

IV.終わりに

絶対価値としての真の家庭の幸福観は、結局、人間が絶対神の対象位置に立つことから出発することが分かる。真の家庭の幸福観が、この地上に実体的な基準で席を占めるためには‘ために生きる’真の愛を通じて実現されることを明らかにしなければならない。交叉結婚を通じて成り立っている祝福結婚もこのような真の家庭の幸福観を実践するための過程を展開している。

国家間の価値観と文化の障壁を越えて、夫婦として生きていくことができるのも、真の愛の実践を行って幸せな家庭を創り出そうとする意図があるから可能である。

さらに、絶対価値としての真の家庭の幸福は祝福を通じて成り立つことを言うべきだ。そのためには祝福家庭が実際に各家庭において、いかなる伝統を通じて、真の家庭を作るために努力するか、知らなければならない。現在、真の家庭における唯一無二な伝統は、家庭で天のご父母様と真のご父母様を迎える伝統である。祝福家庭が実際的な真の愛の人生による過程を通じて、家庭において真の愛の伝統を相続しようと努力する過程で成り立つことができる幸福である。

万難に勝って勝利して、天の権勢があらわれる後天時代に入ったことを宣言したこの時である。絶対価値として真の愛を通じて分性的に実体化されるところ家庭を築いて、祝福が実体の祝福になるために努力しなければならない。そのためには、まず神の真の愛を通じて、私たちの心が変化して心の平和を所有しなければならない。この平和を通じて、家庭において父母の愛を安着させなければならない。また心の平和を通じて再創造され、夫婦と子女の愛を通じて本性の心の変化しなければならない。この平和を通じて、

兄弟の愛を体験して、その愛が私たちの周辺を明かるくする真の愛として人類愛に拡張されなければならない。これが絶対価値としての真の愛から見た真の家庭の幸福観の核心要諦である。

<参考文献>

- カンシンジュ,『哲学 VS 哲学: 東西洋哲学の全て』,ソウル:クリンビ、2014.
- デカルト,キムヒョンヒョ 翻訳,『方法序説/省察/情念論他』,ソウル:三星出版社、1998.
- 文鮮明先生み言葉編纂委員会,『文鮮明先生み言葉選集』 449 冊、450 冊.
- 世界平和教授協議会,『統一思想と学問』 ソウル:一念、1991.
- 世界平和統一家庭連合,『天聖經』 ソウル:成和出版社、2013.
- 世界平和統一家庭連合,『平和経』 ソウル: 成和出版社、2013.
- 世界平和統一家庭連合,『真の父母経』 ソウル: 成和出版社、2015.
- 歴史編纂委員会,『真のご父母様の生涯と摂理』 ソウル: 成和出版社、2009.
- ヨハン・カルトゥン (Johan Galtung)カン・ジョンイル、チョン・テファ、林ソンホ、キム・スンチェ、イジェボン翻訳,『平和的手段による平和』ソウル:トゥルニョク、2000.
- トーマス H.グルーム(Thomas H.Groome)李キムン翻訳『キリスト教的宗教教育』 ソウル:大韓キリスト教長老会総会教育部、1983.
- トーマス H.グルーム(Thomas H.Groome)ジョ・ヨンガン、キム・ギョンイ、イム・スクヒ翻訳,『Will There Be Faith,信仰は持続することができるだろうか?』 ソウル:カトリック大学出版部、2014.
- 統一思想研究院,『統一思想要綱』,ソウル:成和出版社,1994.
- キムハンジェ 「ベンサム功利主義批判に対する再照明」、統一思想学会『統一思想研究』第6集,2013.
- ジョン・シク 「統一思想から見たベンサムの功利主義倫理観」、統一思想学会『統一思想研究』第8集、2015.
- 秦成培「統一論理学から見た形式論理学の批判的考察」、鮮文大学統一思想研究院,『統一思想研究論叢』、1996.
- 文炳祚、「統一思想の本性論から見たハイデッガーの人間観再照明」、『統一思想研究』第8集,2015.
- 文炳祚、「心情体恤のための心の準備過程と適用研究」博士学位論文、鮮文大学、2012.